

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32692

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26360079

研究課題名（和文）アートをまちにひらくことによる新たな地域振興と芸術表現のかたち

研究課題名（英文）New regional promotion and form of art expression by opening art in town

研究代表者

酒百 宏一（SAKAO, Koichi）

東京工科大学・デザイン学部・准教授

研究者番号：90293026

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：地域における民俗資料や文化資源はその土地に根付いた貴重な財産である。しかし、博物館的資料価値の定まっていない地域での営みやその記憶は、時代とともに失われていく。本研究では、地域固有の資源として大田区の町工場を取り上げ、地域振興として活用し、アート的手法で交流を促進、その魅力を新たな芸術表現としての価値として認め、地域住民とともに地域文化を継承していく試みとして一定の評価と認知を得た。

研究成果の概要（英文）：Folklore materials and cultural resources in the region are valuable assets rooted in the land. However, the activities and the memories in the areas where museum material values are not fixed are lost with the times. In this research, we take up the town factory in Ota Ward as region-specific resource, utilize it as a region promotion, promote exchange through art method, recognize its appeal as a value as a new art expression, I gained a certain evaluation and cognition as an attempt to inherit it.

研究分野：地域資源を活用した芸術表現

キーワード：地域資源活用 ワークショップデザイン ソーシャルデザイン アートプロジェクト

1. 研究開始当初の背景

(1) 大田区のモノづくりの歴史は、戦前・戦後を通じて日本の工業の発展に大きく貢献してきた。しかし、時代の移り変わりとともに1983年をピークに町工場の数は、減少の一途をたどっており(図1)新たな視点での地域資源への見直しや活性化への必要性も求められる状態であったといえる。

(2) 研究代表者は、これまでアートによる地域振興の施策を個人の研究活動として行っており、所属する東京工科大学がある大田区の区民団体からの要請により関わった「モノづくりとアートでつなぐ国際交流」(主催NPO 大森まちづくりカフェ)という事業にアーティストとして参加したことがきっかけとなり、大田区町工場を一つの地域資源として、振興目的の交流活動を行った経緯があった。

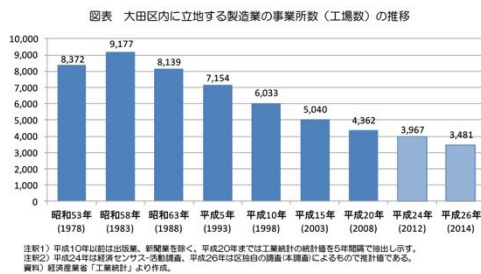


図1.大田区内に立地する製造業の事業所数の推移

2. 研究の目的

(1) 本研究は、地域における資源(モノづくり)を活かした芸術表現(アートプロジェクト)を、まちなかで展開していくことによって、人や場所、まちの歴史と現在、そして将来に向けたつながりをつくり、地域のアイデンティティを守り、伝え、持続可能な地域振興の新たな交流や賑わいを生み出していくことを目的とする。

(2) また、研究代表者自らの平面表現として、美術の古典的な描画技法(フロッターージュ)を基にした独自の手法によって、失われてゆかたつての人々の営みを貴重な文化資源として記録し、作品へと還元することで、美的価値を見だし、その土地固有の暮らしのかたちに理解を深めてもらうことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 本研究の目的は、芸術表現における地域振興を模索することであり、地域における新たなつながりを創出するためにある。そのためにまず地域振興そのもののあり方について現状の把握から行った。昨今の地域で開催されるトリエンナーレ(3年に1回)形式の芸術祭やアートイベントに足を運び、地域の

アイデンティティとその芸術表現との関連性や地域住民がイベントにどのようなかたちで関わっているのかなど、実施する側からの立場でのリサーチを行った。

(2) 芸術表現をまちなかに展開していくにあたり、活動可能な場所を確保して、定期的なワークショップや展示などを行う。また活動実施にあたっては、地域住民はもとより研究に関して多くの交流者を求めていかなければならないため、活動を広める広報的な手段を図った。本研究を「オオタノカケラ」と名付け、活動内容が伝わりやすい言葉にして、より興味がもてるよう配慮し、またチラシでは、より活動内容が相手に伝わるようなデザインを心がけた。印刷して地域の公共施設や団体などに向けて発送。またフェイスブックを使ったSNSの発信、情報サイトやマスコミ各社によるプレスリリース等により参加者を募る方法をとった。



図2.参加募集案内で使用したチラシ

(3) ワークショップでは、子どもから大人まで誰もが参加できるフロッターージュという描画技法を使用した。これは町工場ですぐに使用された道具の上に紙を置き、色鉛筆でこするように描くことで、道具の凹凸が写し取ることができるもので、絵を描くというある種の壁も取り払われ、比較的簡易に取り組めるものとして研究代表者がこれまでも多く取り入れてきたものである。また、町工場の道具の提供に関しては、前述の1.研究開始当初の背景(2)で取り上げた「モノづくりとアートでつなぐ国際交流」(主催NPO 大森まちづくりカフェ)の事業に参加した際に、出会った方の理解と協力を得て、使用している。



図3.フロッターージュで道具を写しとるようす

(4) 本研究活動の実態、客観的な検証として参加者からアンケートを実施した。質問項目は、性別、年代、住まい、情報取得手段、参加の動機、参加した感想、研究に関する意見や要望などといった7項目について60人から聴取した。

4. 研究成果

(1) 芸術表現による地域振興として研究代表者は、これまで参加作家として山口県宇部市、大阪府大阪市、新潟県十日町市、新潟県新潟市、台湾（中華民国）台北市などで作品発表を行っており、また地域住民主体のアートプロジェクトに監修者として東京都荒川区南千住や新潟県新潟市江南区で運営に携わっており、いわゆる内部での立場でこれまで芸術表現による地域振興を見てきた。今回の研究では、イベントの鑑賞者という外側からの視点で、千葉県市原市より開催された「中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックス」、北海道札幌市で開催された「札幌国際芸術祭」、神奈川県横浜市の「ヨコハマトリエンナーレ」の3つのアートイベントについて現地調査を行なった。調査のポイントについては以下の3つについて調査した。

- その土地と開催コンセプトについて
- 地域住民のイベントへの関わり方
- 継続的なつながりについての取り組み

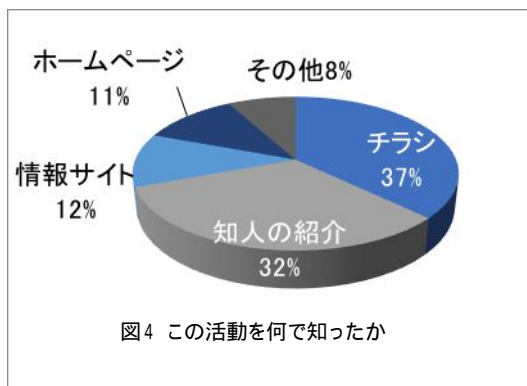
「中房総国際芸術祭いちほらアート×ミックス」と「札幌国際芸術祭」は、今回初めて主催する立場であり、先行して各地で行われている芸術祭が実施された後の開催となることから、どのような展開をするかが注目された。市原については、廃校や小湊鐵道といったローカル線での移動を積極的に取り入れ、食や自然を地域資源として明確に打ち出している。また長期的にアーティストが関わることをコンセプトに掲げている点から、地域住民との関係も継続的な視野でソフトづくりへの可能性も考慮している。札幌は、国際都市として観光資源も豊かで歴史的にも日本の近代化を担ってきたことから、市原とは大きく異なる背景がある。今回のテーマは「都市と自然」。まさに北海道の自然と都市のあり方を模索するコンセプトを打ち出した。しかしあまりに真っ当過ぎて、つかみどころのないテーマとなってしまった感が否めないのではないかと。作品の展開場所も美術館や大型施設での展示が多く、いわゆる鑑賞型の展示が目立った。地域住民の芸術祭への関わりもどこまで作品づくりに関わっていたのかが読み取れず、継続的な視野についても、今後はどうつながるの

かが今ひとつ伝わってこなかった。

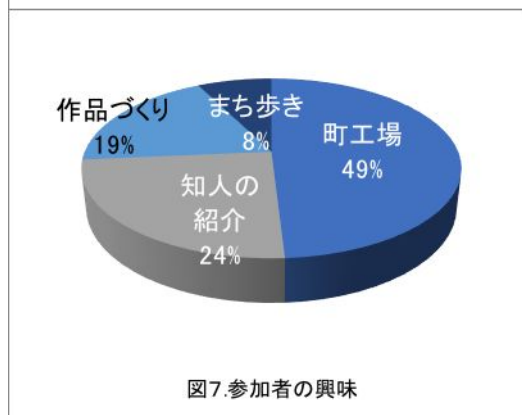
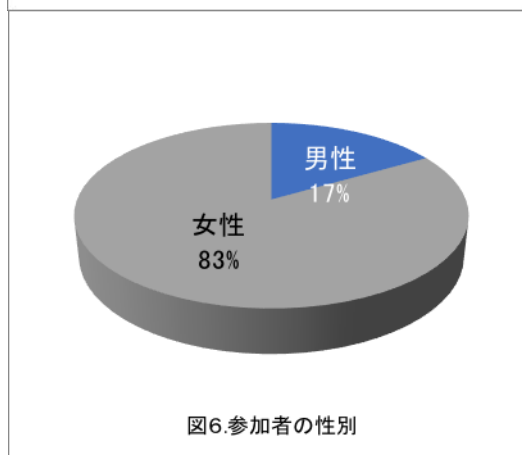
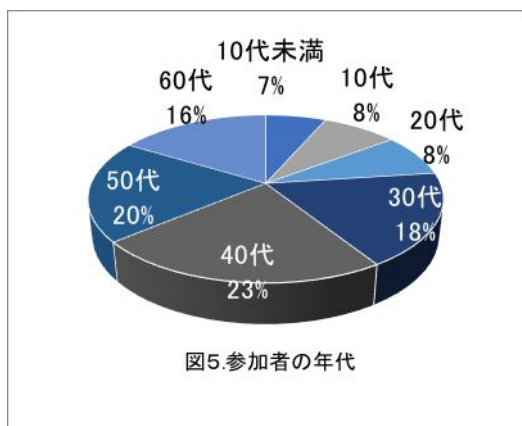
「ヨコハマトリエンナーレ」は、2001年に第1回を開催してからアートを通じたまちづくりを掲げ、創造都市政策として都市圏でのこうした芸術祭では、アートを受け入れる土壤ができているといえる。また毎回総合ディレクターを招聘し、地域性というよりも現代社会に対するテーマを掲げ、実施している。今回はアーティストック・ディレクターとして作家の森村泰昌氏を迎え、「忘却」をテーマとして臨海部で開催した。

今回調査したこれらの芸術祭のなかで地域に求められる課題を抱えた状態で行われた「いちほらアート×ミックス」は、市長自らが「課題解決型の芸術祭」を目指すと明言しており、そうした意味でも本研究での地域資源を活用した芸術表現として参考になるものであった。ここで40歳前後のアーティストが長期的に地域に関わりながら作品づくりを継続的に展開することも本研究に共通する部分が見られた。今後もこの芸術祭の運営や作品づくりがもたらす影響を注視していきたい。

(2) アートをまちにひらくことを前提として活動を展開するにあたり、研究を実施する会場を探ることが求められた。まずは可能な範囲でこの研究のきっかけとなった「モノづくりとアートでつなぐ国際交流」（主催 NPO 大森まちづくりカフェ）の際実施会場として使用した実績から、同じ場所を使用し、活動を開始し、周知していくこととした。その周知手段として毎回チラシを作成し、大田区内の公共の文化施設などに配布した。また地域情報サイトに投稿するなどして周知を計った。実際に参加者が何を見て参加したのかがアンケート結果によると一番多かったのが、チラシであった。（図4）また参加者の年齢の内訳をみると（図5）30代～60代の中年層が7割から8割を占めることから本研究では、SNSなどの情報端末を使った周知よりも直接的な紙媒体による周知方法が効果的であることがわかった。また、参加者の性別をみると圧倒的に女性が多く、（図6）ま



た、参加者が何をきっかけに参加したのかを聞くと(図7)やはり町工場に対する関心が高く、普段なかなか立ち入ることのできない町工場への女性の積極的な行動力の高さが見て取れる。



(3) 活動の2年目からは、単に道具を写しとるワークショップだけではなく、その道具を提供していただいた大田区北糺谷の町工場を直接参加者に見学してもらった後に道具による写しとりのワークショップを行うといった流れに変えた。また、町工場のある北糺谷は、大田区の住工一体型の町工場が多く残っており、そうした地域固有の町並みも参加者にとっても新鮮に映るのではと計画した。これにより、参加者へのアンケートでも「工場見学との組み合わせで充実したプランだ

った」との声や「実際にモノづくりの現場を見てから道具を手に取った時の感覚が違う」などといった反応があり、その後もこのまち歩きを兼ねた工場までの移動と工場見学、そして道具の写しとりによる作品づくりは、参加者の大田区を体験する流れを確立した。

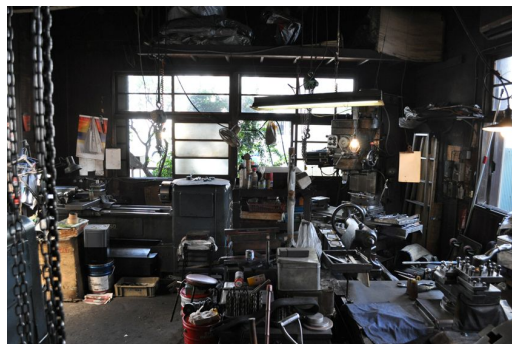


図8.北糺谷の町工場(綱島製作所)

(4) その後も定期的なワークショップを継続させていくなかで、徐々に活動も地域に浸透していき、町工場の跡をギャラリーとしているオーナーと知り合えたことや大田区立郷土博物館の特別展開連イベントとして招いていただいたことなど継続して行っていることの反応も得ることができた。研究開始当時、参加者よりも学生スタッフの数が多かったこともあったが、「オオタノカケラ vol.2 (2015年5月17日・6月21日)」は14名の参加人数。「オオタノカケラ vol.3 (11月7日・8日・29日)」は31名の参加者と徐々に増えていった。

(5) 研究の3年目は最終年度となることから、これまで参加者が道具を写した作品を展示する機会を設けることを計画。そのために、より多くの作品を集めるためにワークショップの回数を増やすことと、展示に多くの方々に足を運んでもらうために活動を広めるために、この2点について、前半のうちに実行できるように計画した。

まずワークショップは、これまでの北糺谷の町工場に加え、六郷地区の2つの工場を追加し、3つのそれぞれの工場までのまち歩きコースを設定した。合計6回のワークショップで73人の参加人数があり、中には3つのコースをすべて体験される方なども複数名あった。

活動を広める計画については、コニカミノルタ主催の社会活動系デザインを奨励するソーシャルデザインアワード2016という公募展に応募した。これに入選すれば、新宿駅東口そばのビルで展示する

機会を与えられることと同時に、分野や資格に関係なく、活動内容に対して評価が与えられることも応募するきっかけとなった。幸い入選も果たし、協賛社のイデーより特別賞もいただくこととなり、その副賞として東京駅の新丸ビルイデー店舗ウィンドウディスプレイとして展示することになった。

コニカミノルタソーシャルデザインアワードは、2011年に東日本大震災が一つのきっかけとなって、これからの社会をよりよく、より幸せな社会へしていくために、何らかのアクションを起こし、アイデアにかたちを与えていくこと。そうして生まれたモノゴトの持続可能な「しくみ」をつくっていく「ソーシャルデザイン」の考え方・思考に基づいたプロジェクト、プランニングによって生まれた作品のクオリティや意義、波及力などを含め総合的に評価する公募展である。ここでの評価は、この研究活動の実績についての理解と、さらにこれを推し進める将来的な可能性にも期待されているということで、本研究を後押しするものとなった。



図9.ワークショップのようす

(6) 上記(5)の目的である展覧会実施にあたって、展覧会の趣旨は以下のとおりである。

- ・ 道具を写しとる参加者個々の作品づくりは、大きな作品の一部を形成するもので、それは大田区の町工場同士の連携や一つ一つの部品が一つでも欠けても成り立たないという大田区の町工場のあり方と共通した側面を持つこと。
- ・ 展覧会という場をまちなかに持つことで、単に鑑賞する場というよりも町工場を通したさまざまな交流の場を生成すること。
- ・ 町工場という資源を作品化することで、美的価値として捉え直し、大田区固有の営みへの理解につなげること。

上記の点をふまえ、展覧会を構成した展示物

について、その内容と成果について下記に記す。



図10. 展示会場のようす

会場中央にドラム缶26缶を配し、その周囲に巻きつくように990点のワークショップによって写しとられた作品を1枚の帯状にして展観した。1枚1枚は、皆が同じように写した道具だが、人それぞれに描き方や構図のとり方、また凸面が写しとられて凹面が描き残されることで、版画の手法として写しとれることや形や色、質感などが際立ってくることで、モノから図像に置き換わり、逆に道具そのものについて美的再評価を促した。

会場(図10)の奥の壁面には研究代表者自らが制作した平面表現作品を展示した。これらの作品群は、解体されてしまう町工場の大きな扉の一部や、すでに閉鎖した町工場の床など、それらは取るに足らない些細なものであるが、何十年と工場の営みと共にずっとそこにあり続け、経年変化や使用の痕跡などで固有の色合いや様相に変化しているそのあり様を研究代表者がその物質の上に紙をあて、その上から同じ色合いになるように色鉛筆を何色も重ねて描いた作品である。これも前述の のように全体の一部として切り取ることで、モノ自体として見るのではなく図像としての描画面を通して改めてそのモノのあり様を問うものである。

展示期間中には、研究活動で継続しているワークショップに加え、アーティスト・トーク、町工場に関する二人とのゲストトークを実施した。また大田区での町工場イベントとして定着している「おおたオープンファクトリー」の連携企画としても加わり、互いに行き交う人や、遠方から興味をもって参加した人、研究代表者と旧知の人、偶然通りかかった人、町工場で働く人、リタイヤした人、など様々な立場の人々が、町工場跡のギャラリーを介して交流が生まれていった。



図 11. 町工場だった会場の床を写した作品(途中)

(7) 地域における民俗資料や文化資源はその土地に根付いた貴重な財産である。しかし、博物館的資料価値の定まっていない地域での営みやその記憶は、時代とともに失われていく。また、現代のアートも美術的価値のあるものは美術館で保管され鑑賞されるべき美術として扱われる。本研究では、地域固有の資源を地域振興としていかに活用し、アートの手法で交流を促進、その魅力を新たな芸術表現としての価値として認め、地域住民とともに地域文化を継承していく試みとして一定の評価と認知を得た。



図 12. 会場でのようす

< 引用文献 >

大田区産業経済部産業振興課、大田区ものづくり産業等実態調査「調査結果の概要」、平成 27 年 3 月、2 頁
 オオタノカケラ事務局 オオタノカケラ vol.3 参加募集案内、平成 27 年 10 月
 北川フラム、いちはらアート×ミックス 実行委員会監修、中房総国際芸術祭 2014 公式ガイドブック 美術出版社
 創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会 札幌国際芸術祭 2014 公式ガイドブック スイッチ・パブリッシング
 コニカミノルタウェブサイト、ソーシャルデザインアワード 2016 募集要項、
https://www.konicaminolta.jp/plaza/social-design-award_2016/index.html

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔その他〕

ホームページ：

<http://www.sakao-lifeworks.com/otanokakera/>

Facebook ページ：

<https://www.facebook.com/otanokakera/>

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

酒百 宏一 (SAKAO, Koichi)

東京工科大学・デザイン学部・准教授

研究者番号：26360079

(2) 研究協力者

綱嶋 毅泰 (TSUNASHIMA, Takeyasu)

綱嶋 喜代美 (TSUNASHIMA, Kiyomi)

水口 恵子 (MINAGUCHI, Keiko)